

# 田山花袋『白紙』の「小説作法」

—— 創作背景・試み・方法 ——

山 本 歩

## 一、問題点の整理

田山花袋の『白紙』は明治四十二年一月の「早稲田文学」に発表されたごく短い小説である。花袋にとって明治四十二年は『蒲団』で自然主義作家としての地位を確立し、『生』でさらなる脚光を浴び、そしてまた『妻』『田舎教師』の刊行を控えた意欲に富んだ時期であったと言えよう。そしてまた、自然主義文学そのもののピークでもあった。しかしそのようなタイミングで発表された『白紙』はと言えば、一見して自然主義的要素は薄く、「色情狂」になったある文学者の日記の中から出た反古の数々」と前置きされたテキストはひたすらに、書かれた「文学者」の内面を提示するのであって、一見して自然主義的な要素は薄い。

今、我々はこの作品を論じていく上で、幾つかの問題点を見出すであろう。後々言及する便利を鑑み、この自然主義的側面の薄さから生じる成立への疑問、『白紙』は何を背景に書かれたのかという疑問を、問題Aと呼びたい。以下、本論で述べ得る問題に対して、同様にナンバリングしていきたい。

さて、同時代評では、「時事新報 文芸週報」が「二葉亭の訳した『血笑記』を思出させるような作」<sup>(1)</sup>、「帝國文

学」が、

何だかアンドレエフの短編にでもありそうな気がする。終の方に、「無数な大きな腹が其処にも此処にも眼に附く」とあるのを読んで、たしか血笑記の中に暗闇の裡に無数の死人の足が白く見えるとかいうような事を書いてあったのを想出したが、これはアンドレエフの方が感じが好い。<sup>(2)</sup>

として、象徴主義文学として注目されたアンドレーエフ『血笑記』（原題『Кривизна смех』一九〇四年。日本では明治四十一年八月に二葉亭四迷訳で刊行）と関連付けられた。ここで指摘されている箇所は、『血笑記』終盤に登場する幻覚で、大地から無数に湧く死骸の足の裏が「微白」<sup>(3)</sup>というシーンで、幻覚ということを除けばさほど『白紙』との関連性はない。むしろ『血笑記』との比較において重要なのは、「白紙」というものに関する記述だ。

「沢山お書きなさい。ペンも乾いたのじゃない、——生々しい人間の血潮を含んでいる。原稿も白紙のように見えようが、其方が寧ろ好い。何も書いてないだけに無気味で、聡明な人達が種々な事を書立てるよりも、戦争や理性に付いて多くを語る。お書きなさい、お書きなさい、沢山お書きなさい。」<sup>(4)</sup>

『血笑記』では「白紙」はむしろ「戦争や理性に付いて多くを語る」ものである。もちろんこれは、戦争のために精神に異常を来した兄（正確にはその幻影）の手による「白紙」であるからだが、狂人の作り出す白紙が、「種々な事を書立てるよりも」かえって「多くを語る」とする考えは花袋の『白紙』にも表れているように思える。『白紙』において「白紙」は「恐ろしい」「何んなことでも書いてある方がまだしも好い」とされる。「白紙」が「空虚」を連想させるからだが、これは換言すれば「書いてある」ことの限定性よりも、「白紙」の「無限無窮」性が恐ろしいということである。「肉の問題」について「無限」にあらゆる事柄を語るからこそ、「恐ろしい」のである。『血笑記』では「戦争や理性」の問題が、「語」り、解き明かすべきものであったからこそ「白紙」を肯定的に捉えるのだが、『白紙』は「肉の問題」が「語」るべきでないもの、常人が考えるべきではない「狂」気であるために「白紙」は「恐ろ

し」さの対象となる。こうした白紙の「無限」性において両者に共通点が見られるとするならば、この評者の感じた類似も間違いではない。

このように『白紙』には象徴主義文学に見られるような「狂気」が描かれる。これに対し「何うしても健全者の書いた発狂日記である、之れ位ではまだ発狂されまい」という厳しい同時代評<sup>⑤</sup>も見受けられる。ではこれを単に象徴主義の稚拙な模倣と捉えるべきであろうか。『白紙』に見られる「狂気」はどのような狙いを持っていたのだろうか。こうした疑問を問題点Bとしたい。

同時代評にみたび注目すると、先述「帝国文学」では「小説というよりは小品として読者に多少の興味を与える」とも評されている。しかし無論花袋はこれを「小説」として書いたのである。それは雑誌上で小説として取り扱われた以上に、こう評されたにも関わらず花袋の小説集である『花袋集第二』に収録されたことに示される。であるとするならば花袋の直近作品に見られるような自然主義の書き振りからは些か外れたこの『白紙』が、花袋においてどう「小説」たり得たのか、それを考察しておくことは、彼の小説観を我々が知る意味でも重要であろう。この小説観を本論では問題点Cとする。

今ひとつ言及しておかねばならないのは、書誌情報である。『白紙』は四十二年三月の『花袋集第二』に収録されるにあたって、末尾の次の部分が削除されている。

（其日新聞は某氏の発狂を報じた。某氏は、お茶の水水道橋間の電車の中で、腰を掛けて居た美しい妙齡の処女の前に、づかづかと進んで、突然其手を握り占めた。続いて抱附こうとする処を人々から抱とめられた……）

「帝国文学」で「最後にある括弧中の説明は無い方が宜かろうと思う」と評されたことに首肯するような形での改稿である。

また『花袋集第二』から平成七年三月の『定本花袋全集 第二十三巻』に収録される際、「……」という約物が削

減されたようだ。初出、並びに『花袋集第二』における『白紙』では文章中に三点リーダー「…」が登場する際、基本的には四つ打たれている。これは、例えば『花袋集第二』のその他の作品において「…」がほとんどの場合二つ分か打たれていないことを見ると、明らかに意図的なのである。さらに最も顕著な部分として、

……駄目だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ。己は敗北した。敗北した。

この四十八の「…」は『定本』では省略され、

……駄目だ、駄目だ、駄目だ。己は敗北した。となつている。

本論では、やはり花袋生前に出された初出版および『花袋集』版の表現を重視したい。となれば問題となるのは「…」のみならず、氾濫とも言えるほどに作中に登場する「——」「?」「!」「—」といった約物であろう。これこそが『白紙』の特徴と言つてよい。

## 二、自然主義への揶揄

花袋が明治四十一年七月に書いた作品に『不安』がある。この四十一年頃、花袋は身体的には脚気、精神的には鬱に近い状態にあつた。正確には同年五月の『一家の主人』にも漠然とした不安が登場し、『不安』『白紙』を経て『拳銃』（四十二年四月）『畏』（四十二年十月）まで、不安・煩悶を主題として扱っていく。

『不安』で主要に取り扱われるのは、何ら罪悪を犯していないにも関わらず、社会から罪人として糾弾されるのではないかという不安である。「四」では「曾て関係した女」の「死骸」が荷物の中に入っているのではないかという

妄想にとらわれ、それが自身を「社会的自殺」に追い込むのではないかという危惧に至る。「人殺」↓「色情狂」↓「死骸」の所持、という風に展開していくのだが、その内「色情狂」、すなわち「三」の部分、

女の白い腕が何だ。女の臭い髪が何だ。女の柔かい肌が何だ。世の中には色盲ということがあると同時に、色情狂と謂うことがある。貴様のようなことを考える奴は千人に一人、萬人に一人も無い。皆な平々凡々に暮らして居る。

こうした箇所を膨らませたものが『白紙』と言えるかも知れない。『不安』の、

群集が自分を取囲む。罵る声が騒々しく四辺に聞える、丈の高い大男が拳骨を振上げて自分を撲る。『こんな奴は撲り殺してええ！』『風上に置けない馬鹿者だ！』『色狂』などとさまざま罵倒が耳に入る。

と罵られる妄想は、『白紙』の削除された末尾にも符号する。『不安』では「色情狂」扱いされることと、殺人容疑を「不安」の核としているが、『白紙』では犯罪の原因に「肉の問題」が置かれている。

なぜ「肉」が問題視されたのか。花袋自身の「肉」への問題意識はひとまず置き、四十一年から四十二年にかけて書かれた作品、殊に『不安』と『白紙』の背景には、自然主義作家がまさに「色情狂」のように扱われた時事が関わりあると思われる。すなわちこれが、問題点Aを解く手がかりである。

明治四十一年二月、生田葵山が「都会」を掲載した「文芸倶楽部」が「風俗壊乱」として発禁に処された。主人公の上官が、主人公の妻に言い寄るといふ内容が「姦通」であり「卑猥」とされたのだった。また、葵山と、「文芸倶楽部」編集者兼発行人である石橋思案の起訴が話題を呼んでいる。第一審は同年二月二十七日、東京地方裁判所で行われている。葵山は、作中人物は情事を行っていないことを主張したが、三月五日の判決で葵山二〇円、思案四〇円（編集者であり発行人であったため、二件の違反を犯した扱い）の罰金を科せられたのだった。控訴による第二審（六月二十七日）では弁護人（渡辺雨山、宮島五丈原、平出露花）が美学者文学者（大塚保次、島村抱月、夏目漱石

を要請)による鑑定の必要を弁じたが退けられ、七月四日棄却となった。<sup>6)</sup>

花袋が編集長を努める「文章世界」では同年三月、特集として「肉欲描写について」を扱った。執筆者は徳富蘇峰(「明かに外道である」)、山路愛山(「小説は道徳書ではないから」)、三宅雪嶺(「露骨が漸時婉曲になる」)である。蘇峰は自然主義そのものを否定し、愛山は肉欲も人間の一面であるから司法が大袈裟に騒ぐ必要のないことを述べ、雪嶺は検閲は行うべきだが肉欲描写はそれに合わせ婉曲的になっていくだろうと予想した。共通するのは誰も検閲を批判していない点である。もちろん「文芸倶楽部」発禁直後に出版社側が批判記事を容認することはないのであろうが(『教育雑誌の側面を持つ「文章世界」ではなおさら)、こうした態度は当時の作家に一般的であった。

しかし、三月には続いて森田草平と平塚明子(後のらいてう)の心中事件が「自然主義の高潮」(朝日新聞)という見出しで報道された。ここでは自然主義が「性欲満足主義」と同義に捉えられている。そして自然主義作家が性愛、ことにインモラルな肉欲と結び付けられていくのである。前後して池田亀太郎の女風呂の覗き、並びに婦女暴行殺人事件、世に言う「出歯亀事件」が発生。先述の論調に乗る形で池田の犯行と自然主義が結び付けられる。かくして自然主義は「出歯亀主義」と揶揄され、性欲の絡む事件の原因が自然主義流行に求められていく。

「朝日新聞」が殊更自然主義をゴシップと結び付け異常なものとして扱ったのは、あるいはこの時期、花袋の『生』を掲載し、「自然主義雑評」などで自然主義を評価していた「読売新聞」に対抗する意味合いもあったのかも知れない。しかしともかく、こうした新聞記事が民衆に自然主義「色情狂」という図式を植え付けていったであろうことは想像に難くない。

『不安』及び『白紙』はこうした自然主義(作家)＝性欲満足主義＝風俗壊乱という風潮を受けたものと言え、殊に『白紙』はより「肉の問題」にフォーカスを当て、自然主義を取り巻く言説と具体的に向き合ったものである。

ここで『白紙』の内容を見てみよう。「反古」の書き手である文学者は「肉の問題」を「総ての悲劇」の原因だと

する。過剰なまでに性欲を問題視し、「新聞」に出た「不倫の行為」を取り上げた上で「蒲団と血」という言葉を持ち出す。この「蒲団」は花袋の代表作『蒲団』を連想させるが、それは恐らく意図的で、自然主義的な、と言うよりも肉欲の香り付けのために用いられた言葉であろう。それに関連して言えば、削除された末尾に「電車」「処女」が用いられるのは、やはり自身の短編『少女病』を連想させる目的があるだろう。「総て」を肉欲の帰結と見なす、肉欲第一主義とも言うべき文学者は、明らかに過剰に描かれている。

また、この文学者はどうやら「恋人」を亡くしているが、愛欲と死が自然主義について回る言葉であったことは、森田・平塚の心中事件の記事を見てもわかる。「短刀」で妊婦を襲う妄想も、出歯亀事件を思わせる。「総ての殺傷」が「肉の問題」から起こると述べられているように、愛欲↓死・殺傷、という構図が文学者の頭の中にある。だがこの構図は、まさしく当時自然主義を取り巻いたものであって、マスコミによって愛欲↓死がすぐさま自然主義に結び付けられたことに似るのである。

しかし、『白紙』本来の眼目が「肉の問題」にあるとは言えないだろう。自然主義＝性欲満足主義などという攻撃は極めて低レベルなものであって、花袋は積極的に反論していない。ただし、マスコミの自然主義観に潜む、より根本的な問題に花袋は気づいていた。それは大衆が、少なくとも大衆を扇動する一部のマスコミが、文学作品を、その題材や描写の不道徳性によって非難するということである。換言すれば、不道徳的な描写や取材をする〈意義〉を評価する土台が存在しないということである。花袋が憂えたのはそこではないのだろうか。

### 三、「狂」の意味合い

本来、花袋は当然、自然主義作家が「色情狂」ではないことを証明せねばならない立場にあるし、自然主義は「肉

の問題」ばかりを扱うものではないことを知らしめなければ「不安」は解消されないはずだ。にも関わらずなぜ『白紙』は冒頭に「肉の問題」を掲げ、主人公を「色情狂になった」と設定しなければならなかったのだろうか。

検閲に対する挑戦、と見ることも不可能ではないだろう。しかし花袋はどちらかと言えば（他の作家の大多数に同じく）検閲に対しては穏健派であった。花袋が向き合ったのも司法ではなく、その判決を受けて短絡的に自然主義を揶揄する、マスコミないし世間の方だった。もつとも、前述したように〈反論〉や〈反発〉ではない。

それは一面、自らに及びかねない悪評をも種にしてしまう作家的態度の表れであり、そして花袋の目的は、逆説的な物言いになるが、作家が「色情狂」ではないことを証明することであった。

そもそも、作中の文学者と花袋はイコールではない。むしろ『白紙』におけるような問題提起を、客観化し批判する視座をも獲得している。明治四十二年七月の『小説作法』によれば、

女は嘘をつくと男はよく言う。又、女はだまされて居ると言うことをよく言う。けれど、考えて見ると、嘘をつくのでもなければ、だまされて居るのでもなくて、女が矢張解らないからだと思う。<sup>(7)</sup>

男が女に対して抱く疑惑の念は、異性の内面を本質的には理解できないからであり、決して女が「嘘を付」いているわけではない。『小説作法』の記述が、教育者として達観を装ったものだとしても、「女は嘘をつく」と男はよく言うことに對して異を唱える視座は持ち合わせていた。ここから、少なくとも女性への疑惑については、花袋が『白紙』の文学者とは異なる見解を有していることがわかる。

また、作中、文学者は「ストリンドベルヒ」（ストリンドベリ）を持ち出し称揚するが、花袋はこの頃、ストリンドベリについて「女性をわざと引下げて卑しくしている」<sup>(8)</sup>と述べている。すなわちストリンドベリは「わざと」女性を蔑んで書いていると見ており、やはりこの文学者と作者花袋の間には距離が存在する。文学者はかなり極端な考えを持った人物なのであって、畢竟この小説は「肉の問題」についての思弁を眼目としていない。



ここまでをまとめると、花袋は自然主義を過剰に性欲・肉欲と結び付け、風俗壊乱の原因と見る世相を受ける形で、あえて「肉の問題」への言及を行った。しかし『白紙』が描こうとしているのは、その「肉の問題」そのものではない。

では『白紙』の本質とは何か。それは正しく問題点Bに関わる。「色情狂」とされる人物が、およそ外部の目に触れえない「日記」の「反古」で「肉の問題」を語り、それが狂気へと進行していくという、その形式そのものを見なければならぬ。

ここで問題点Bを考察することが必要になる。『白紙』の後半部は、女性について考えるあまりに、ダツシユや白紙にまで神経を苛立たせる記述が示され、やがて「？」とダツシユという約物で締められる、「狂」の進行が描かれている。クローズアップされるのは「色情」ではなく「狂」の部分なのだ。

この「狂」が象徴主義と結びつけられたのであるが、花袋は自然主義に親しむ一方で、象徴主義にも興味を寄せていた。明治三十五年九月の「西花余香」（『太平洋』に連載）では次のように言及している。

この派の運動は、主観も主観、極端の主観説で、所謂写真主義客観主義からは太くその趣を異にして居る。（自然主義は多少の影響を与て居るけれど）この派の言う所によると、常識とか普通とかは更に芸術の至重の要約とは為らぬので、詩人は何でも過敏なる神経、聡明なる耳、事物以上にある者を見る眼、神秘のある者を観破する力などを持って居なければならぬ。（略）

従って、この派の作者には狂気ということがいつも伴う。（略）則ち、かれ等は冥搜煩悶の結果、その主観の情を逞うし、その神経をいよいよ過敏ならしめ、狂に至らざるは止まざるのである。そして、その狂的作品、これが最高の芸術である、と、かれ等は信じて居るのである。<sup>9)</sup>

この象徴主義作家への理解は重要である。花袋はネルヴァル（ネルヴァル）、ラホルグ（ラフォルグ）、ベルレーヌ

（ヴェルレーヌ）、マラルメ等を詩作に伴う「冥搜煩悶」の末に狂ったとしているが、『白紙』の人物は正しくこうした「文学者」であった。

つまり、花袋が『白紙』で試みたのは象徴主義小説そのものではなく、「極端の主観」のために狂気に陥っていく作家を、「極端の主観」の形で描くことだった。留意しておくべきことは、こうした作家の狂気は「過敏なる神経、聰明なる耳、事物以上にある者を見る眼、神秘のある者を観破する力」によって発生するものである、と花袋は捉えていることだ。狂気の上に創作が成されるのではなく、創作の結果狂気が生じると解釈される。すなわち「神経」「耳」「眼」を振るう「主観」的創作が狂気の脈絡に他ならない。

「狂」には「冥搜煩悶」という脈絡がある。文学者の内面の「狂」と、他者が外部から判定する「色情狂」としての狂気は別物なのである。他者は狂気を、どこまでも外面的な行動でしか判断し得ない。行為の異常性から、それに見合う狂気を持った内面を想像し、嘲弄する。そしてまた、程度の問題こそあれ、この構造は、新聞が自然主義者の内面を、作品を読み書く行為から連想したこと、そして無関係な事件の加害者にもその想像された内面を当てはめたことと同じである。『白紙』の「狂」はそうではなく、内面における脈絡・進行が強調されるものである。

外部から認定される狂気の内実を明らかにすること。世間的には単に「色情狂」と片づけられた男の内部に確かに存在した思考の脈絡を追うこと。それは取りも直さず、〈正常とは何か〉を問うことに繋がっていく。同時代言説は自然主義を異質なものとして扱った。自然主義に関わる者は風紀を乱す異常者だと断定された。新聞は正常な世間を代表して、その異常者たちを糾弾した。しかし葵山は決して肉欲描写を目的としたわけではなかったし、さらに言えば森田も平塚も、池田亀太郎でさえも、単一のイデオロギーに回収されることのない、動機の脈絡性を所持していたはずだ。外面的には理解できぬ異常者であっても、その内部には必ずそこに至るまでの脈絡が存在するのだ。『白紙』で、花袋はまさしくその〈正常〉を問い詰めようとしたのだ。

「肉の問題」の思弁はそのための材料に過ぎなかったが、文学者の文章中にはつきり表れている花袋の思想は次の通りである。

笑って居る、卑んで居る、不徳な男だと言つて居る。その笑つて居る奴、卑んで居る奴、不徳な男だと言つた奴、其奴が矢張所謂不倫の行爲をした男と同じ人間だから面白い。同じ血が流れて居るのだから面白い。

誰にも等しく存在する脈絡を描き、「色情狂」と卑しむ「平気」の人々には見出し得ない真実を明らかにすることこそ、『白紙』の目的なのだ。批判や反発、挑戦でこそないものの、それは文学を表面的な描写でしか問題にせず、作家がそれを書く意義⇨真実追究を解し得ない人々への静かな態度表明であつた。

また、この目的から、改稿理由も察することができる。『白紙』は元、作家が「色情狂になつた」という、「反古」の外部からの記述に始まり、「新聞」が「発狂」を報じたことを述べるという、やはり外部からの記述に終わるものだつた。なぜ同時代評が末尾部分を不要と言ひ、なぜ花袋がそれに従つたかと言へば、それは恐らく「発狂」がしよせんは外部の見解、新聞の一方的な報道に過ぎないものだからだろう。問題の核はその世間的な事実にはない。であるから外部の見解は冒頭の「色情狂」で充分だと判断されたのだろう。

#### 四、『白紙』の「小説作法」

A・Bの二点を理解した上で、我々はCの問題点を論じなければならない。すなわち『白紙』の「小説」性とは何か、である。

そもそも明治三十年代後半から四十年代は、花袋が「小説」のありよう、書き方について最も考え、最も述べた期間であつただろう。三十九年三月に「文章世界」を主筆として創刊した花袋は、誌上で「文章講壇」「文章講話」な

どの欄を受け持ち、青年たちに小説の作法を説いた。そうした指南は博文館「通俗作文全書」の最終巻、先に引用した『小説作法』にまとめられた。また投書欄では主に懸賞小説部門を担当し、青年投書家たちの小説に評価を下す立場にあった。『白紙』はその時期のただ中に書かれた作品であり、小説作法の指南文の中に見える花袋の小説観から見る事が可能であろう。

まず問題としておくべきことは、これまでも言及してきた「日記」の「反古」という形式についてである。少なくともこの時期、花袋は日記というものに対し、決して書き手の真実が書かれるものではないという思いを抱いていたようだ。

『日記』に顕われた其人の人物は、大抵正面的で、側面的でない。即いて居て離れて居ない。空中に浮き出して居ない。だから、作者が『日記』を材料にして其人物を描こうとする場合には、全然其の『日記』を信用することは出来ない。その感想と情緒とは殊に信用することが出来ない。<sup>③</sup>

また、小説と懺悔録を比較する際に、「懺悔は日記と同じく、まだ虚偽を容れる余地がある」として、次のように続ける。

懺悔をする人は、過去の懺悔をするに当っても現在の自己の利益というものを打算して考えている。生存上不便な懺悔をするものではない。だから懺悔録に本当の事実が顕われていると思うのは大間違である。懺悔録は性質として、ある処まで言つて、そのあとは美しい理想の筆で包んで置く。つまり実行上のことであるからである。

直接の利害を直接に感ずることであるからである。まごまごすれば自己の生存が出来なくなるからである。<sup>④</sup>

ここで花袋の主張の妥当性を述べたいのではない。問題は花袋が「日記」や「懺悔録」と「小説」を「事実」の多寡において区別し、「小説」をより「虚偽」のないものとして上位に置いていることである。そうすることで小説に意義を持たせる言説なのである。

『白紙』の文学者の「日記」も、やはり「正面的」で「美しい理想の筆で包んで」おかれたもの、対外的な虚飾に満ちたものだったのかも知れない。しかしその中で、「反古」とされた文章だけは、彼の内面の深いところを語っていると見えるだろう。「日記」という、パーソナルでありながら自己（時には他者）という読み手を想定した文章から弾かれた「反古」。それはもはや誰の目にも触れ得ない、書き手にすら読み返されることのない、隠された真実。「狂」の部分の担っているのではないだろうか。花袋にとって「反古」は日記という営みの中で唯一「小説」になし得るものであった。

「狂」の脈絡は先述の通り、世間の目が外面的には見出し得ない〈正常〉さを証明するものである。『小説作法』は「裏面に複雑な心理を包んだ『現象のあらわれ』それを精細に綿密に描くのが小説の領分」<sup>(2)</sup>とする。『白紙』は『現象のあらわれ』までを書いているとは言い難いが、「複雑な心理」の脈絡を描くべく、「反古」という演出を採用したのである。隠された脈絡の発見という形は花袋が小説に求めたものだった。そこにある事実性の重さこそが、まず『白紙』を、花袋にとって、「小品」ならぬ「小説」と認めさせていたのだ。

また、『小説作法』は、タイトルにも関わらず「作法」の否定に始まっている。

小説に作法などと言うことは無い。苟くも作法らしいものが頭脳に出来て来れば、もう其小説は型に入つて居る。新しい生気を其中から得ることは出来なくなつて居る。<sup>(3)</sup>

これは花袋が『小説作法』全編を通して、小説が「型」に入ることと批判し、その破壊を奨励したために他ならない。小説を定型化してしまう恐れのあるメソッドを、まず否定しなければならなかったのである。

『小説作法』は初学者に向けて書かれたものだが、「型」にはまることへの恐怖は、作家としての花袋にとつても自明のものであったに違いない。ではその「型」を回避し、絶えず自分の文章を更新していくにはどうすればいいのか。『小説作法』では「修練」「教養」を挙げている。同じく「文章世界」に掲載した文章教育をまとめた「文章新

語」(明治四十四年十二月の『花袋文語』に収録)では、「文字の面から読者は新しいとか旧いとかいう感じを起すもの」とする。

新しい文章を作ろうとするには、観方感じ方を新しくしなければならぬのは言うまでもないが、文字の選択に就いても大に心を用いなければならぬ。

文字は遣い方如何に由つて、新しくもなれば旧くもなる。文字は作者の心持にしっくり合つた字を用いた時に於て、始めて光彩を放つて来る。<sup>(14)</sup>

ここで言う「文字の遣い方」は漢字・平仮名の取捨選択や、語彙の選択・配列などを指すと思われる。これらの認識を承知した上で読めば、『白紙』は確かに「型」を破り、「新し」さを試みているように思える。

前述のように、「狂」の進行が本格的に表現されていくのは後半部である。「直線と曲線」が「逢う期が無い」ことは「思うままに逢われぬ」という、男女関係を思わせる表現に繋がっていく。「空虚」が「白紙」と結びつけられる。この後半部は連想を用いて進められる。

「白紙」の中に「色」が見える、明滅するその「色」が女の「唇」「腕」に収束されるイメージときて、そんなことを考えている自分を「浅間しい」と思うが、直後に「何が浅間しいって、懐妊した女」と、女の「浅間し」さに矛先が向けられてしまう。そして妊婦の「色気」がないことを強調し、女性の抗い得ない魅力を損なおうとするのだが、その意識は「空虚」打破の願望へと流れ、短刀で腹を抉る妄想を生むのである。「灰色の空気が蔽かぶさった」心と対照的に「眼に映る」色彩表現は「暗い重苦しい空」から「西の地平線を線でも引いたように割って居る晴れた細い碧の空」という矛盾した形容ヘグラデーションのように連ねられる。「西の空」は西方浄土、すなわち「死」を思わせる。その眼はやがて「田舎娘」という女性に付属する「手拭」と「大根」の「白」のイメージに向けられる。

非連続的な要素を飛躍的な連想で結びつける形で「狂」は表現されていく。さらに過剰なまでの約物が「狂」を視



『白紙』という作品ではなかったか。

花袋が約物について何を考えていたのかの手がかりとなるのは、明治四十二年五月「文章世界」中で花袋が書いた「文章講話」欄である。そこで、以前から「一度は出来るだけ詳しく、分り易く答えて見たい」<sup>16)</sup>と思っけていて未だ為さなかつた様々な約物の使い方を、二葉亭訳のツルゲーネフ『片恋』をモデルとし、解説している。花袋がここで紹介したのは、「――」にしても「……」にしてもごく基本的なもので、今日目新しいところはない。けれども「感嘆符なり疑問符なりは、唯だその場の言葉の意味を、耳に聞かせると同時に、目にも見せ」<sup>17)</sup>るといふことからはその視覚的效果を十分に認識していたことがわかる。『白紙』の約物は「狂」の視覚的表現のための、「新しい」「文字の遣い方」であつたのだ。

『小説作法』が冒頭から奨励した「型」の破壊。その破壊のための赴きであることも、どのような「作法」にもまして、『白紙』における「小説」意識を強めていると言える。

問題点Cを「日記」と「反古」の関係、そして「型」の破壊のための修辞技法から考察していった。もつとも同時代評に立ち戻ればこうした「小説」としての矜持は評価されなかつたし、花袋のその後の文学に再び『白紙』ほど「型」破りなものは登場しなかつた。しかしながら花袋はその後も創作と並行して「小説」のありようを論じ続ける。『白紙』はその活発な運動の一端を示す作として、今日興味深いのである。

なお、蛇足ながら、『白紙』発表の一年後、明治四十三年二月の「文章世界」懸賞小説欄で、『白紙』に酷似した小説「瞬間」が「秀逸」賞を受けている。作者である山内秋生に対し花袋は「模倣したような処はいやだが、何処か光つたところがある」<sup>18)</sup>と選評を与えた。「死んだ友の日記」という形で生殖と誕生について煩悶するその模倣作は、『白紙』が決して目立たぬ作には終わらなかつたことを、僅かばかり示している。



- 註
- (1) 無署名「一月の雑誌」(初出「時事新報 文芸週報」明治四十二年一月二十七日)『文藝時評大系 明治篇第十二卷』所収  
平成十七年十一月 ゆまに書房 三〇頁
- (2) MY「最近文芸概観 小説戯曲」(初出「帝国文学」明治四十二年二月) 同(1)所収 四七頁  
アンドレーエフ(二葉亭四迷訳)『血笑記』明治四十一年八月 易風社 二四四頁
- (3) 同右 二〇七頁
- (4) 霹靂火「正月の小説界」(初出「国民文学」明治四十二年一月) 同右所収 一三頁
- (5) この事情は、ジェイ・ルービン著(今井泰子・大木俊夫・木股知史・河野賢司・鈴木美津子訳)『風俗壊乱 明治国家と文芸の検閲』(平成二十三年四月 世織書房)に詳しい。
- (6) 田山花袋「小説作法」『定本花袋全集 第二十六卷』所収 平成七年六月 臨川書房 二九二頁
- (7) 同右 二九二頁
- (8) 同(7)に「雑文集」として収録 四二頁
- (9) 田山花袋「文章新語」『田山花袋全集 第十五卷』所収 昭和四十九年三月 文泉堂書店 一六五頁
- (10) 同(7) 二二五～二二六頁
- (11) 同(7) 二二七頁
- (12) 同(7) 二一八頁
- (13) 同(10) 一七五頁
- (14) 田山花袋「文章講話」『文章世界』明治四十二年五月 博文館 一六二～一八二頁
- (15) 田山花袋「懸賞小説の評」『文章世界』増刊梅花号 明治四十三年二月 博文館 二二〇頁
- (16)

——大学院文学研究科博士課程後期課程——